# 今を読む

AMDA理事長
菅波 茂

# 不条理な世に連帯創出

## メディアの公共性

十月十七日に岡山市で開催された第五十九回新聞大会（日本新聞協会主催）で記念講演をした。「人道支援におけるメディアの役割―AMDAの経験を通じて」が演題で、訴えたかったのはメディアの公共性についてだった。

公共性とは「なくてはみんなが困ること」。ちなみに、公益性とは「あればみんなの役に立つこと」である。メディアの公共性は不条理の世界に放り出された人に対する連帯感の創出にあると思っている。「何故にこのような目に遭うのか」に対して「あなたを見放さない、あなたを見捨てない、あなたを見限らない」とのメッセージを発信することである。

○ ○ ○

今、それが十二分になされているだろうか。例えば、「国際貢献」の分野。「国際協力」に代わり、この言葉がメディアに頻繁に登場するようになったのは一九九〇年の湾岸戦争以後である。

日本は、クウェートに侵攻したイラクと戦った多国籍軍を主体に当時の一年分のODA（政府開発援助）を超える約百四十億ドルを拠出したといわれている。しかし、戦争後、クウェートが米国の新聞紙上で感謝した三十カ国に日本の名前はなかった。

「顔の見えない日本」。この衝撃が日本中を震撼させた。国際貢献とは何か―を深く論議し、定義することなく、外務省はNGOに対する公的支援を強化し、郵政省（現・日本郵政公社）は国際ボランティア貯金を発足させた。こうして「国際貢献とは平時のNGO、紛争時の自衛隊」のイメージだけが定着した。メッセージなき国際協力といえる。

だが、「なぜ今、国際貢献なのか。不条理な世界を前にどんな役に立つのか」に対する説明のない善意は拒否されるだろう。世界には日本が発信しなければならない二つのグループがある。世界を動かしている「啓典の民」と世界人口の八割を占める「血縁共同体社会」である。

「啓典の民」とは旧約聖書、新約聖書そしてコーランを信仰する人たちである。民が神との契約を破った時に、神は民を皆殺しにする前に預言者を派遣する。預言を守れば救済される。預言者の宗教ではメッセージが肝要である。一方の血縁共同体社会の人たちには「家族として、友として」行動し、発言することがキーワードとなる。

二〇〇四年二月、イラク復興支援特別措置法に基づいて海上自衛隊呉基地（呉市）から輸送艦がクウェートへ派遣された時、私は中国新聞社から取材を受けた。「日本はイラクの友として、白血病やがんなど劣化ウラン弾の後遺症に悩む子どもたちのために『サマーワ・ヒロシマ子ども病院』をつくる。そして広島大原爆放射線医科学研究所が支援し、自衛隊が警護しては」と提案した。

この発言には次のような思いを込めていた。シーア派もスンニ派も絶対に支持する。子どもは大人の希望だから。また、イスラムの人たちにとって日本といえば、日露戦争と東郷元帥、ヒロシマと原爆である。「誰が劣化ウラン弾を発射したのか。誰が原爆を落としたのか」。被害者同士を結びつける影のメッセージも含めた。

主権在民国家では、全知全能である神に選ばれた預言者は国会議員といえる。その代表が内閣である。「世界で唯一の被爆国として、劣化ウラン弾に苦しむイラクの友を見捨てない」。自衛隊を派遣する前に、総理大臣あるいは大臣クラスがアルジャジーラやアルアラビアで彼らにこうしたメッセージを伝えるべきだった。広島県知事や広島市長でも良かった。

○ ○ ○

日本が国際社会で孤立しない世論形成こそがメディアの公共性である。今ほど「啓典の民」と「血縁共同体社会」との良きコミュニケーションが求められている時代はないだろう。「何故にこのような目に遭うのか」。彼らの切実な問いを常に念頭にメッセージを発信し続けてほしい。